

自作短歌

胎動を伝ふる妻の腹深く未明の海を巡る黒潮

大屋根に佛と共に包まれて唐招提寺に雨降りしきる

きんちん

黄蛹の羽化近き日よみどり子は生え初むる齒で我れの指かむ

卯木咲く木洩れ日の野に吾子放ち印象派となりゆく我が眼

背丈ある我れより先におきな子がポツリに気づき夕立の降る

しじまなる湖の面に影映しまるき己を眺めをる月

雨の日も欠かさず水やる子どももゐて養護クラスに朝顔咲けり

明日へ向かふ通過列車は走り去り無人ホームに残る我が影

輸入肉喰ふ我が腹の何処にか難民帰れと黒き声する

槍ヶ岳青く膨らむ空を突き雨を降らせて平らかな池

愛らしく程よくじゃれてしっぽ振り適度に吠えるロボットの犬

乗客の不快な視線浴びながら車内転がるコーヒーの缶

土匂ふ菜の花畑に足を止め浮かぶ唱歌を口ずさむ春

富士の峯やがて見えむと「モルダウ」を聴きつつ過ぎすのぞみE席